

平成30年6月12日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25770174

研究課題名（和文）中世漢字片仮名交じり文における小字仮名を中心とした書記史的研究

研究課題名（英文）Characteristics of Japanese Writing in a Historical Perspective: Focus on Miniscule Kana in Medieval Japanese Kanji-Katakana Mixed Script Texts

研究代表者

村井 宏栄 (MURAI, Hiroe)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・講師

研究者番号：40610770

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中世という日本語書記法の多様性が最も拡大化した時期において、漢字片仮名交じり文の書記法を調査し、小字仮名の用法とその他文字分節方法との関わりを解明を目指したものである。本研究においては特に親鸞関係資料に注目し、『三帖和讃』においては「大字仮名＋小字仮名」の表記種連続において小字仮名「ニ」への偏りが見られること、また『西方指南抄』の同仮名連続においては、同字反復が語頭に偏るのに対して重点（踊り字、「、」）が非語頭に集中するという明確な分布を示し、仮名遣いの問題とともに言語分節の標示という点から統一的な説明を示した。

研究成果の概要（英文）：This study surveys the Japanese-language writing method during “the medieval,” a time in which the Japanese writing system was the most diversified. Covering the writing methods used in texts composed with a mix of kanji and katakana, this study aims to clarify miniscule kana usage characteristics, and how they were related to other segmenting methods of letters. Materials related to Shinran form a particular focus of the study. Clear trends were observed such as, in the Sanjo Wasan, for orthographical sequences of majuscule kana + miniscule kana, there was a definite partiality toward the miniscule kana ni (ニ); also, while sequences of repeated kana letters in Saiho Shinansho were concentrated at the beginnings of phrases, instances of the iteration mark (odoriji) “、” were clustered in the non-initial parts of phrases. This study offered a consistent explanation by focusing on issues related to kana orthography as well as display of language articulation.

研究分野：日本語学

キーワード：漢字片仮名交じり文 重点 踊り字 小字仮名 日本語書記史

### 1. 研究開始当初の背景

現代の漢字仮名交じり文表記とは異なり、中古・中世に多く見られる漢字片仮名交じり文表記(いわゆる片仮名文・漢字交じり片仮名文を含む)では、複合的に交用された3種類の表記種を多く見ることができる。

釈迦ノ御ノリ正覚成給シ日ヨリ涅槃ニ入  
給シ夜ニイタルマテ説給ヘル諸ノ事一モマ  
コトナラヌハナシ

(観智院本『三宝絵詞』中巻)

上の例では、一文中において、漢字、大字による片仮名(以下「大字仮名」)のほか、「(涅槃)ニ」「(マコトナラヌ)ハ」など行の右寄せ・小書きの片仮名(以下「小字仮名」)によって記しており、3種類の表記種による書き分けを認めることができる。これは歴史言語的に見ても稀有の現象と言える。これら3種類は、表記される文字体系の異なりとして漢字/仮名が、文字の大/小という点で漢字・大字仮名/小字仮名が対立する。この表記法における一般的傾向として、「自立語の書き出しは漢字・大字仮名では始まるが、小字仮名で始まることはない」という事実が存在する。文字連結において小字仮名が現れるのは、常に漢字・大字仮名に後置される場合である。よってこれら3種のうち、小字仮名のみは他の2種に対して補助的従属的役割を担うと言える。現代では失われた、「大きく書く/小さく書く」という文字大小による標示は、書記史上何を意味し、中世以降どのようにして衰退していったのかという問題は重要のはずであるが、ほとんど未解明の状態である。

併せて、中世漢字片仮名交じり文表記において言語分節を境界標示するのは表記種の交替のみではない。句読点や朱点の挿入、分かち書きなどによって、可読性の向上につながっていると考えられる。これら各事象の相関関係もまた明らかとは言えない。かかる問題を解明することによって、将来的には現代日本語書記法への展開と道程が記述可能と考えられる。

### 2. 研究の目的

上記の視点から、本研究は中世という日本語書記法の多様性が最も拡大化した時期において、漢字片仮名交じり文の書記法を調査し、中でも小字仮名の用法を考究していく。その際、その他言語分節方法との関わりでの解明を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究は中世という日本語書記法の多様性が最も拡大化した時期において、漢字片仮名交じり文の書記法を調査し、中でも小字仮名の用法を全般的に調査していく。同時に、漢字片仮名交じり文において、小字仮名以外の言語分節の境界標示方法との関わりでの解明を目指す。そのため、平成25~29年度にかけて、次の作業を行った。

中世漢字片仮名交じり文文献に用いられた書記方法・書記特徴の幅広い調査

中でも、特に13世紀仏教人として自筆の漢字片仮名交じり文資料が大量に残存する親鸞関係資料について、その書記体裁の調査

調査方法を将来的に多方面の研究に役立てていくため、コンピュータを用いたデータベースの作成・用例入力

に基づく結果の解析と、口頭発表及び論旨の改善、追加の調査

上記期間においては調査した漢字片仮名交じり文文献は主として下記の資料である。

- ・親鸞『西方指南抄』  
奥書によると、康元元~2年(1256-57)親鸞84-85歳時の自筆書写にかかるものである。内容は法然上人の法語・消息・行状等の言行録である。『西方指南抄』は、親鸞遺文資料群において『教行信証』と並ぶ大部の言語量を誇る。
- ・親鸞『三帖和讃』  
「浄土和讃」・「高僧和讃」・「正像末法和讃」の総称。「浄土和讃」と「高僧和讃」は宝治2(1248)年成立し、三重県専修寺蔵国宝『三帖和讃』の当該二種は、平松(1974)によると、一部に親鸞真筆を含むものの、大部分が専修寺二世真仏の書写かと推定されている。書写年代は平松によると、初稿本の成った宝治2(1248)年から、建長7(1255)年の間か。対して「正像末和讃」は正嘉元(1257)年に成立し、旧表紙裏の記述から覚然筆、成立年代以降の書写かと推定される。本文は七五調四句形式を貴重とした韻文形式歌謡であり、浄土教の教義をうたい、高僧の軌跡を賛美しながら信仰を鼓舞する。漢字には音訓に亘って懇切な振り仮名、左訓注釈、四声等が施され、七・五音四句を基本形式とし、各句ごとに改行が施される。
- ・親鸞『一念多念文意』『尊号真像銘文』『唯信抄』『唯信抄文意』  
上記以外の漢字片仮名交じり文で記された親鸞関係遺文

13世紀に成立した親鸞遺文は、親鸞自筆の真蹟が多数伝来し、他者の書写を経ていないという意味において、日本語史研究の第一級資料に位置付けられる。親鸞遺文は、漢字片仮名交じり文で記されるものを含み、それらは、多くが片仮名宣命書きを含みつつ、大字片仮名を多く交用させる表記体となっている。

なお、上記期間のうち平成26年2月~平成27年3月及び平成28年2月~平成29年3月の計2回、研究代表者の産前産後休暇・育児休業によって研究活動を中断している。

#### 4. 研究成果

##### (1) 小字仮名

親鸞関係遺文の小字仮名については、名古屋大学国語国文学会 2013 年度春季大会シンポジウムにおいて『三帖和讃』の小字仮名中世仏教者による漢字片仮名交じり文テキストとして」と題して口頭発表を行い、同シンポジウムのパネリストとして討論に参加した。以下にその概要を示す。

親鸞『三帖和讃』における小字仮名用例の全数調査を行った結果、まず全体的傾向として、小字仮名は漢字に多く後置し、中でもその形態は「ニ」と「ヲ」が抜きんでていることが判明した。特に「ニ」の場合、複合辞「ニハ」、大字仮名に後置する「ニ」とあわせ、小字形態の約半数が「ニ」の形態を伴っていることになる(135 例、47.7%)。大字仮名に小字仮名が後置する例も認められるが、これは「ニ」に集中する(「ヒトエニ」6 例、「オホキニ」2 例、「イマニ」「コトクニ」「ツネニ」「フネニ」「モロトモニ」「ユエニ」「ユヘニ」「ユメニ」各 1 例)。これらの小字形態「ニ」は助詞に限定されるわけではなく、副詞語末(「ツネニ」「ヒトエニ」「モロトモニ」)、形容動詞連用形(「オホキニ」)等、多様な品詞に所属する。

ヒトエニ念佛ス、メケル(149・4)

ミナモロトモニ帰セシメテ(255・3)

サワリオホキニ徳オホシ(188・4)

また、小字仮名「ニ」の出現は、「无量劫ニモ」「希有ニシテ」「報土ニハ」のように、複合辞の一部であったとしても、「ニ」のみを小字化するという表記が観察されることから、これらにおいては、意識的に「ニ」の形態のみを小字化した現象であるということを目指せる。

无量劫ニモマレラナリ(88・4)

如来ノ光瑞希有ニシテ(72・1)

願力成就ノ報土ニハ(222・1)

かかる傾向は以前村井(2006)で示した傾向に近く、大字+小字 表記における「ニ」への集中は、和讃・説話文学・軍記物語など、テキスト性に拘束されず広く認められ、漢字片仮名交じり文における一定の書記様式であった可能性が存する。

さらに、中世漢文文書の助詞表記は、以後の文書に比べて万葉仮名「仁」による助詞「に」の表記が特徴的であるという先行研究の指摘が見られた(矢田 2012、初出は 2000)。この指摘が有効であるならば、これまで研究代表者が考えていた、和讃・説話文学・軍記物語など、資料のテキスト性によらない中世漢字片仮名交じり文表記における「ニ」の小字化という枠を越えて漢文体という別個の表記体においても現象の共通性が指摘できる。

また、漢字片仮名交じり文で記された親鸞関係資料を見渡した場合、『尊号真像銘文』『一念多念文意』『唯信抄』『唯信抄文意』の各資料には 大字仮名+小字仮名 の表記連続は一般的に見られず、一方、分かち書きを

多用はしない『三帖和讃』『西方指南抄』ではこの表記連続がまま見られることが判明した。『三帖和讃』は韻文形式であり、各句ごとに改行が施されることから仮名を小字化する必然性に乏しいはずであるが、仮名の小字化は、懇切丁寧な振り仮名、豊富な左訓注釈、朱点による差声等の事象と並ぶ、徹底的な読み・解釈の向上を狙ったためのものと位置付けた。

漢字片仮名交じり文を書き記す際、言語分節の境界を表示する手段には、およそ以下のものが考えられる。

文字体系の交替(漢字 仮名、仮名 漢字)

文字の大小の交替(大 小、小 大)

句読点・朱点の挿入

スペースの挿入(分かち書き)

改行

連綿

仮名遣い・異体仮名の使用

重点(いわゆる踊り字、「ヽ、」)の使用

これらの中で片仮名大小の書き分けや分かち書きなどの現象は、その見極めにおいて連続性を持ちうるアナログ性が認められ、資料によっては客観的な数値化が難しい場合がある。この点をふまえた上で小字仮名現象は漢字片仮名交じり文書記における位置付けとモデル化が必要である。

##### (2) 重点

(1)で浮上した問題解決のため、本研究課題においては言語分節の境界標示方法として重点を取り上げた。

親鸞の漢字片仮名交じり文書記における重点については、第 139 回名古屋言語研究会例会において『西方指南抄』における重点について」と題して口頭発表を行い、その後資料調査範囲の追加と論旨の改善を行った上で『椋山女学園大学研究論集人文科学篇』第 49 号に同題で論文投稿を行った。

平仮名文献の世界では、13 世紀頃からは語頭における重点の使用が次第に姿を消し、このことは異体仮名の使い分けを促進させる契機となった。平仮名に比して片仮名は異体仮名を多く持たず、連綿を前提としない。散らし書き等、美的要素と言える側面も見出しがたい。また、親鸞遺文の漢字片仮名交じり文研究においては、後に述べるように、独自の仮名遣いの実践、漢字音古用の墨守、使用漢字の制限等、規範的態度が多く注目されてきた。そうした傾向と重点用法との関連も未解明であった。上記論文はかかる視点から、平仮名文献の世界において「異体仮名の使い分けが本格的な段階に入」った(矢田 2012、初出は 1995)とされる 13 世紀当時の漢字片仮名交じり文献として親鸞『西方指南抄』を取り上げ、その重点の用法について以下 2 点を報告したものである。

第一に、『西方指南抄』の重点及び同字反

復を觀察すると、下記の例のように文節頭では同字反復することで重点を用いず、逆に非文節頭(自立語語中尾・付屬語)では重点を用いる傾向が見出された。

コノ<sup>二</sup>経<sup>一</sup>ニ<sup>二</sup>ハ<sup>一</sup>シ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>ニ(文節頭・同字反復)  
往生ノ<sup>二</sup>ノ<sup>一</sup>ソ<sup>二</sup>ミ(文節頭・同字反復)  
コ<sup>二</sup>ノ<sup>一</sup>口(非文節頭・重点)  
キ<sup>二</sup>ノ<sup>一</sup>テ(非文節頭・重点)

概して、書記法の一貫性はかなり高いと評価できる。重点は基本的に文節境界をまたがず、前接要素との連続性を標示することで文節を単位とする標示に寄与し、可読性の向上につながっていると言える。付屬語においても自立語語中尾と同様に重点が優位であるものの、自立語語頭・語中尾に比して偏りは少ない。例外的に同字反復が見られる助詞についても、引用内容と主節とが意味まとまりとして別次元ととらえられる「ト」や、境界標示のマークとして特徴的であった「ニ」など、要因がそれぞれ推察された。

第二に、同音が連続する場合、重点・同字反復以外の方法として、仮名遣いによる異仮名の表記が考えられる。『西方指南抄』におけるこの手段について、圧倒的多数を占めるのは、下記のような「～ヲ+動詞」及び「オホ～」の各語である。

#### 【～ヲ+動詞】

～ヲオカム(拝) ～ヲオク(置) ～ヲ  
オクル(送) ～ヲオコス(発・起) ～  
ヲオコナフ(行) ～ヲオサム(収・修)  
～ヲオシフ(教) ～ヲオシム(惜) ～  
ヲオソル(恐・懼) ～ヲオトロカス(驚)  
～ヲオホシメス(思召) ～ヲオモフ(思・  
想) ～ヲオロス(下・降)

#### 【オホ～】

オホイカタ(大筏) オホカタ(大方) オ  
ホキナリ(大) オホケナシ オホコ(大  
胡) オホシ・オホク(多) オホス・オ  
ホセ(仰) オホタニ(大谷) オホチ(大  
路) オホフ(覆) オホマワリ(大回)  
オホヤウ(大様) オホヤケ(公) オホ  
ヨソ(大凡)

このうち「～ヲ+動詞」は、「オ」から始まる動詞が多いこと、かつ助詞「ヲ」が頻用されることの二点に起因しており、「ヲ」(オ)は、他に比べて広く同音が連続しやすい環境下にあったと言える。本書の「～ヲ+動詞」の動詞部分は歴史的仮名遣い、定家仮名遣いのそれぞれに符合しないものをそれぞれ含み、動詞語頭を「オ」に統一することで「～ヲ+動詞」は同字連続とはならない。すなわち、「オ」は言語分節上 語頭、対して「ヲ」は 非語頭のマークとして機能していたと指摘でき、重点の用法と共に、言語分節の文字上の標示と位置付けられた。

しかしながら一方で、中世仏教者の著述した漢字片仮名交じり文文献であっても、重点

が文節頭に出現する例はまに見られる。次の用例は『却癡忘記』・『光言句義釈聴集記』の例であり、両書は共に高山寺明恵の聞書類である。

アノムカヒノ山ノフモトニタナヒキタル雲モソコアケテコラムセヨ<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>オモシロキモノカナ(『却癡忘記』)  
サルホトニアチ<sup>二</sup>カヒコチ<sup>一</sup>カウ也云々(『光言句義釈聴集記』)

上記の例からわかるように、明恵関連資料では重点が文節頭に現れる例は散見され、同時期の仏教者による漢字片仮名交じり文の著述であったとしても、重点用法には個人差が認められるものと考えられる。『唯信抄』、『唯信鈔文意』、『一念多念文意』等、他の漢字片仮名交じり文からなる親鸞遺文における重点のありよう、ひいては、13世紀における漢字片仮名交じり文における重点用法の一般的状況の解明に関しては、十分な検討を行うに至っていない。この部分に関しては、平成 30～32 年度に取り組み新たな研究課題「中世漢字片仮名交じり文における重点を中心とした書記史的研究」(課題番号: 18K00626)に引き継ぎ、継続していく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

村井宏榮、『西方指南抄』における重点について、椙山女学園大学研究論集人文科学篇、査読無、第49号、2018、49-63

〔学会発表〕(計2件)

村井宏榮、『三帖和讃』の小字仮名 中世仏教者による漢字片仮名交じり文テキストとして、名古屋大学国語国文学会 2013 年度春季大会シンポジウム「文献から見た日本語の歴史」口頭発表及びパネリスト、2013 年 7 月 13 日、於名古屋大学文学部(愛知県・名古屋市)

村井宏榮「『西方指南抄』における重点について」、第139回名古屋言語研究会例会、2015 年 11 月 21 日、於名古屋大学文学部(愛知県・名古屋市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

村井 宏栄 (MURAI, Hiroe)  
椋山女学園大学・国際コミュニケーション  
学部・講師  
研究者番号：40610770

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )